



イーストマン教授のトランペット「白熱教室」

息と唇の関係↓

「野球のバットを強く握ってしまつて自由なスイングができないう、それと同じです」



イーストマン音楽学校教授

# ジェイムス・トンプソン

第18回浜松国際管楽器アカデミー&フェスティバルの講師として来日。「バズィングブック」の著者として知られる氏は、トランペットのあらゆる側面に深い見識をもち、その発言やアドバイスの一つ一つが我々の脳を活性化させてくれる。

PROFILE  
1949年ドイツのフランクフルト生まれ。アメリカで教育を受け、ニューイングランド音楽院でロジェ・ボワザンに師事。モントリオール交響楽団、アトランタ交響楽団各首席を歴任し、これまでに80枚以上のCDにその演奏を残している。1979年モリス・アンドレ国際コンクール優勝。1998年からイーストマン音楽学校教授。ソロでも世界的に活躍している。

取材・構成 写真 今泉晃一  
記事協賛 ヤマハ株式会社

7月31日から始まった浜松国際管楽器アカデミーでトンプソンさんのレッスンを見学させていただきましたが、レッスンを通じて「耳と頭を使い」とおっしゃっていたのがとても印象的でした。トンプソン 昨日、今日に限ったことではなく、常にレッスンで言っていることです。「自分が今何をしているのか」を意識して吹いて欲しいということ。多くの人はアンブシユアや息の使い方をとても気にしますが、それらは「道具」にすぎないのです。そういった道具をどうしたら上手に使えるのかは、やはり耳と頭を使うしかありません。

重要なのは、自分が出している音の質に注意することです。トランペットの音質というのは倍音と基音のバランスが大きくて、それが上手くいったときに響きが豊かになるのです。そして私が長年教えてきた経験からすると、倍音が十分に含まれた豊かな響きを持つ音は、正しい奏

法の結果なのです。

感覚だけでは、自分の奏法が正しいのか正しくないかを判断するのは難しいです。そういった「音の響き」を聴けば容易に判断が可能です。例えば、アルペジオやスケールなどで速いパッセージを吹くときにも、ひとつひとつの音が良い音で響いていれば、全体のクオリティも上がります。同時に、音の響きが良いということは、唇の反応や、アタックの質も良いということがわかるのです。ここで話した「音の響き」は全ての技術において基本となるものです。そしてそれは、唇の振動と、息の流れのバランスが取れているときに得ることが出来ます。

私がたまたまレッスンルームに入ったとき、トンプソンさんが生徒にアドバイスした言葉が耳に入ってきました。「息がトランペットを吹くんだ。唇が吹くのではない」と。トンプソン 唇というのとても繊細な

ものだから、私たち金管楽器奏者の場合、そこに強く意識が行ってしまいがちです。息の圧力を作り出しているのは横隔膜ですが、それを直接感じ取ることはできません。でも、あるトランペット奏者が世界一美しいアンブシユアを持っていたとしても、息が来なければ唇は何の働きもしないわけです。

結局は、息も唇も、両方のバランスが重要です。息ばかりたくさん入れても、そのバランスが取れていない場合は、唇に力を入れてその息を抑え込むという結果になり、音の質が落ちてしまいます。これは、野球のバットを強く握りしめてしまふのと同じことです。そうすると自由なスイングができなくなってしまうですよ。

そのバランスを上手に取るためには、どんなことに気をつけて、どんなことをすればいいのですか。

トンプソン 話が最初に戻りますが、自分がどんな音を出しているかに注意深く耳を傾けることしかありません。バットを振るときに、「私はこの筋肉にこう力を入れて振る」と普通は考えません。

音の響きを聴けば、奏法が正しいかそうでないかを容易に判断できる。だから自分の音をよく聴くこと！